

求められる人材へのワンステップ

ドイツ・ケルンでの ISCO-OP

成田 好

鹿屋体育大学大学院 体育学研究科 修士課程 2年

1. 実習の目的及び課題

広い視野を持ち、国際的感性を身につけること

自ら考え、自ら行動すること

明白な意志のもと、日独間において様々な疑問を抱くこと

2. 実習内容

実習はケルン体育大学とノイス郡市民スポーツ課の2つの機関で行った。ケルン体育大学ではスポーツクラブに関するデータ翻訳の他に、学会参加、dsj（ドイツ・スポーツユース）訪問など、学術的な面からスポーツに携わることができた。ノイス郡市民スポーツ課ではスポーツクラブに関するデータベースの更新やスポーツクラブ体験（アクアウォーキング、アクアフィットネス、ピラティス、体操）、Schleswig 子どもキャンプ参加、スポーツフェスト名簿作りおよび運営補助と、オフィスでの作業とアクティビティとの両面から、スポーツ運営に直に接することができた。

3. 実施期間

2008年6月24日～同年8月31日

4. 実習機関の概要及び事業

1) Deutsche Sporthochschule Köln (ケルン体育大学)

ドイツ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州ケルンにあるドイツ唯一の体育大学。戦前のベルリン体育大学を前身とし、1947年に再建される形でケルンに創設された。現在は教育学部、社会学部、心理学部、スポーツ医学部など21学部に6000人の生徒が学び、さまざまな研究、教育が行われている。

2) Rhein-Kreis Neuss Haus des Sports (ノイス郡市民スポーツ課)

ドイツ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州ノイス郡を総括するスポーツ振興課である。スポーツを通しての健康づくり、青少年育成を目的に様々なイベント、スポーツ教室を開催するとともにスポーツクラブの管理・育成の補助を行っている。

5. 各実習機関に関する所感

1) Deutsche Sporthochschule Köln

①内容

ケルン体育大学での実習は初日である6月24日から7月20日までの3週間であった。この期間中の籍はケルン体育大学にあったが、いくつかの学会やミーティングに参加させてもらったことや、dsj(ドイツ・スポーツユエグント)に代表されるような調査関連施設を訪問する機会が多かった。学内では、大学院生の部屋の一室を使い、ドイツ全国のスポーツクラブに関する調査資料(英語版)を翻訳する作業を行っていた。学会ではドイツはもとより、イギリス、フランス、ベルギー、オランダに代表されるヨーロッパ諸国の発表、さらに政治や経済の専門家の基調講演を通してヨーロッパがおかれている立場や課題について現状を知ることができた。ヨーロッパならではのゆったりと食事をしながら討論することや、聞き手と話し手の距離が近く、学生でも積極的に質問に応じてくれるスタイルが日本とは大きく違うと感じ、またそのような雰囲気から、たとえ些細なことでも積極的に質問することの大切さを学んだ。

しかし残念なことは、国際学会では使用言語が英語であるため内容を理解することができたが、その他の小規模な学会やミーティングにおいてはすべてドイツ語で進行されるということだ。せっかくの機会であるにも関わらず、状況や資料からしか内容を把握できず、深い部分には関わることができなかった。日常会話に差し支えない程の語学力があれば、より充実した実習になっていただろう。

②自己評価

ケルン体育大学で過ごした期間中は、今思い返せばパソコンに向かっている、または話を聞いている、という受け身的な要素が大きかった。内容からしてもそうせざるを得ない状況ではあったものの、特に大学に居る間は、身近な大学院生ともう少し積極的に交流すればよかったと思う。何気ない会話から意外な発見をすることや、これをやってみたい、というアイデアが生まれることはよくあることだ。

しかし、学会やdsj訪問に関しては、様々な分野の方々と交流する機会に恵まれた。日本人であるということが珍しかったのかもしれないが、一度話をするとたとえ些細なことでも私の納得いくまで丁寧に対応してくれた。これまで、十分に理解していないのに何度も聞き返すことは失礼にあたると勝手な解釈をし、曖昧な返事をしていたことが如何に恥ずべき行為であったかを後悔し、自分の考えをもった上で納得いくまで何度も聞くぐらいの心づもりが必要であると身をもって体験したし、自身もついた。

2) Rhein-Kreis Neuss Haus des Sports

ノイス郡市民スポーツ課では、スポーツクラブに関するデータベースの更新やスポーツ

クラブでのアクティビティ体験， Schleswigh での子どもキャンプ参加，そしてスポーツフェストの名簿作りおよび運営補助を行った。オフィスでは英語を話せるスタッフが担当者の方だけであり，他のスタッフから依頼された仕事を行うたびに彼の仕事をストップさせ，通訳をしてもらうことが申し訳なかった。しかし，オフィス以外では地域の高齢者対象に行われるアクティビティへの参加やスポーツイベントの運営補助，観戦と体を動かす時間が多く，より積極的に取り組むことができた。

◆スポーツクラブに関するデータベース更新

① 内容

ドイツにおけるスポーツクラブは文化的に深く根付いていることもあり，スポーツクラブ一つひとつのデータは創立年数から種目数，会員数，会費やイベントの情報までとても充実したものになっている。これらを一括して取りまとめるのが今回の実習機関であるノイス郡市民スポーツ課であった。

インターネットの環境さえ整っていれば，誰でもどこからでもアクセスでき，お目当てのクラブを見つけ出すのに役立つデータベース。スポーツクラブの情報は随時変更するので，それらと照らし合わせながら変更の更新を行った。日本ではまだこのようなシステムが整っていないため，後々ドイツを見習ってこのようなシステムを構築してほしいものだ。

② 自己評価

先にも述べたが，ドイツにおけるクラブという存在が，市民の交流の場でもあり教育の場でもあり，さらには心のよりどころでもあることがよくわかる。膨大なデータを取り扱うため，作業にはエクセルのほかに統計処理ソフト SPSS を使用した。表示言語は違うとはいえ，操作方法は同じなので，今回は基本的な SPSS の作業が不自由なく行えたことが役に立った。



◆スポーツクラブでのアクティビティ体験

① 内容

スポーツクラブでは地域の高齢者向けのプログラムが多く、曜日毎に場所と内容が異なっていた。参加者は事前に名前の登録と参加費を払い、毎週プログラムを楽しみにしている。初めての体験となったアクアウォーキングでは、腰にベルトをつけ深いプールに体を半分沈めながら行う。腰やひざへの負担が少ないことと、水につかることでリフレッシュできることから、どこの地域へ行っても人気のプログラムのようだ。アクアエクササイズは日本にもあるのと同じではあるが、どちらかという日本のものよりアクティブで、ダンスの要素が強いような印象を受けた。これら2つのプログラムは水中で行うということもあり、初めと終わりには必ず心拍数を測る。また、指導者が直接体調の良し悪しを聞き、場合によっては参加を控えてもらうという徹底がなされていたことから、誰もが安心して参加できるクラブ運営の本来のあり方を間近で見たような気がする。

体操とピラティスは、病院内で行われているプログラムであり、ゆったりと流れる音楽に合わせてストレッチをするという感覚であった。呼吸を意識し、筋肉をほぐしながらプログラム終了後には気分爽快。ここでの参加者はそこまで体を動かして汗を流そうという目的ではないので、自己のペースに合わせてできるこうした教室が人気なのもよくわかる。

様々なプログラムの体験は、日本とは違った指導方法を学ぶ良い機会であった。中には同じような動きもあったが、常に音楽にリズムを合わせて動く動きそのものが、日本よりもアップテンポであり、誰も笑顔で、仲間と楽しんでいる様子が印象的だった。

② 自己評価

今回は様々なプログラムに参加者として体験しただけであったので、自分の評価というものはつけることができない。しかし、実際に体験してとても楽しかった、というのが第一の感想だ。というのも、ドイツ語が分からないとはいえ常に参加者一人ひとりに声をかけるインストラクターがとても陽気であり、常に飽きさせないように、上手く参加者の心を掴んでいたからであろう。



今後このような指導の機会が得られるならば、この経験を生かし、安全に十分配慮した上で笑顔の絶えないプログラムを提供したいと思う。

◆Schleswig 子どもキャンプ参加

① 内容

ドイツ北部、デンマーク国境付近の港町 Schleswig (シュレスビヒ) では、毎年夏季休暇を利用し、10歳から13歳までの子どもを対象とした長期キャンプが行われる。このキャンプに参加する子どもたちは、初めて出会う友達とともに生活し、テレビもゲームもない山の中で3週間を共にする。dsjを訪問した際、ここの活動についての話に興大変味を持った私は、時期的に最後の3日間だけではあるものの、一目その活動状況を見たくはるばるケルンより新幹線を乗り継いで参加した。

Weseby (ヴィーゼビュー) とよばれるこのキャンプでは、130名の子どもたちが集まり、自分のグループのテントに寝泊まりしながら様々な活動を体験する。1日のスケジュールは掲示板に張り出され、特定の活動以外の時間はシャワーを含めて基本的に自由である。何か連絡がある時はロッキーの音楽が放送され、各々が広場に集まりだす。Weseby という掛け声の後に始まる合言葉はとても印象的であった。ここで3日間、子どもたちと同じテントに寝泊まりし、彼らとスポーツをすることや、日本の文化である折り紙やあやとりをして交流を深めた。

② 自己評価

ここでは、私がこれまで日本で体験してきたキャンプの印象を180度変えた。日本でのキャンプというのは、期間が短いとはいえ、常に時間に束縛され忙しく最終日には、ぐったりと疲れきっている姿を見ることもしばしばあった。しかしここでは子どもたちがとてもイキイキとし、テレビもゲームもない山の中で自主的に遊びを見つけ、エネルギーに満ち溢れていたのを思い出す。いきなり現れた



日本人の私にさえ「KO, KO!」と興味をもち、日本語の読み方やあやとり、折り紙を教えて教えてとせがまれながら楽しんだ。彼らは、まだ英語教育を受け始めた子どもばかりであったこともあり、お互いに言いたいことを伝えるのに苦労した。しかしそれが逆に彼らとの交流を深めるきっかけになったのかもしれない。彼らにはたくさんのパワーと、疑いのない純粋な考え方、そして何か工夫して遊びを見つけ楽しむことを教わった。

また、それを運営しているスタッフの若さに驚いた。キャンプ長を筆頭に、ほとんどのスタッフが高校生以下という日本ではあり得ない、というほどの衝撃だったが、時間に縛られることなく、奇抜な発想と子どもに合わせた柔軟な対応をしている様子には驚きを隠せなかった。ここでの経験は、私にも何かできることがあるはずだ、もっと行動を起こそう! というモチベーションに繋がり、以後の実習への考え方にプラスとなった。

◆スポーツフェスト名簿作りおよび運営補助

① 内容

小学生対象のスポーツフェスト（陸上競技 8 種目）の名簿作りおよび大会当日の運営補助を行った。参加は学校単位またはスポーツクラブ単位であり，参加申し込みは FAX で受け付けていたため，受信した手書きの一覧表をエクセルに落とす作業を行った。また，男女それぞれが獲得できるポイント配分に違いがあるため，得点配分表も前年度のものを参考に作成した。

大会当日は早朝から準備に取り掛かり，主に記録された特典票を本部へ引き渡す補助を行った。日本のように大がかりな開会式，表彰式，閉会式は存在せず，いつの間にか解散していたことには驚いたが，こういう地域基盤のイベント運営方法を学ぶにはとても良い機会となった。

② 自己評価

名簿作りの際に，FAX から手書きの文字を解読しエクセルに入力する作業を行ったが，ここでもドイツ語の問題は存在し，名前や名字を間違えて入力することもいくつかあった。通常であれば私が責任を持ちこの仕事をこなすべきであろうが，担当はもう一度 FAX と照らし合わせ確認する作業が追加された。やはり最低限，現地の言葉で日常生活が送れなければ，受け入れ側も参加する側も，お互いに満足のいく実習にはないのだと思う。

8. 全体自己評価及び分析

実を言うと，やる気と能力があれば何でもやらせてもらえる，認めてもらえる社会がうらやましかった。日本では必ずといっていいほど年齢や経験が最優先されるからだ。しかし裏を返せば，それだけ個人の責任能力が問われる厳しい社会であることも事実である。今回の実習を通して，自主性，積極性，は勿論のこと，何事においても自分の意見をしっかり持ち，その意志に基づいて発言する大切さを学んだ。特に海外では，自ら主張しない限り，特に目に留まることなく時は流れていく。少しでも興味を持ったことは，周りの目を気にせずとにかくやってみるという行動力が以前に比べ培われたのではないだろうか。そういった意味での成長を含め，この ISCO-OP 実習が私にとって非常に有益であったことは言うまでもない。

9. 企業・行政機関が求める ISCO-OP 実習生とは

最低限，現地の言葉で日常生活を送ることが可能な人材が，何より優先されるべきであろう。なぜならば，特別な場合を除いて，何事においても常に現地の言葉で進行されていくからだ。英語が世界共通語とはいえ，逐一通訳してもらうには時間的にも内容的にも限

界がある。そして必ずしも全員が英語を操れるとは限らない。

次に、特に海外で行われる ISC-OP では、個人の意見や自主性をもった人材が必要であろう。これはどこへ行こうと同じだと思うが、とりわけ海外では、日本のように担当者が綿密なスケジュールを組むことや、随時状況を見つつ課題を与え、面倒を見てくれるわけではない。多少言葉が通じなくても疑問があれば積極的に質問し、わからないままにしないこと。自分は何のような事に興味があり、自分の能力をどこに生かせるのか。日本での経験を踏まえて、海外では何をしたいのかを具体的にさせているかが重要なのではないだろうか。

そして最後に、好奇心旺盛で広い視野をもつこと、それが大切であると感じた。たくさんのかんことを吸収するには、オープンな考え方が必要であり、そうでなければ日本とは何が違うのか、驚くことも発見できる場面も半減してしまう。常に新しい発見を求めて、探究してほしい。

10. ISCO-OP 実習に関する全体所感

海外で働くということは、自分の力がどれだけ通用するのか、自分には何が足りないのかということを試すチャンスになる。言葉も文化も全く違う新しい世界で、自分一人でチャレンジするには、やはり時間もかかるため、私は ISCO-OP は実習ではなく留学として考えて準備をし、履修計画を立ててほしいと思う。ISCO-OP をある種の留学としてとらえるのであれば、現地の言葉や文化に慣れるため、早めに出発し、心の準備期間を設けた上で短くて3か月、長くて4か月程度の実習が望ましいのではないかと感じた。極端な話、本学での卒業年次を半年、もしくは1年間延ばす心づもりで実習にトライしてもらった方が、より積極的に仕事に取り組めるだろう。それに値する価値のあるプログラムだと思う。

また、せっかく海外で生活できるチャンスである。私の場合、実習期間の合間に地域を探索することや、積極的に現地の人たちと交流してきた。たとえ言葉の壁があろうとも、同じ人間なのだから、伝えたいという気持ちさえあれば相手もわかろうとしてくれるし、日本に興味を持ってくれる。これらの経験は今の私にとってとても良い刺激になっている。